

「真面目者」の憧憬

～沈従文小説における都市部女性の服飾叙述描写から 見えるもの(下編)～

山内智恵美 (大東文化大学外国語学部)

The longing of an earnest man:
some observations from how clothing worn by urban females is
described in the novels of *Shen Congwen*, Part Two

Chiemi YAMAUCHI

概要

本文上篇指出与主流作家不同，沈从文小说表现了对都市新式女性服饰的批判态度，然而，这只是他的服饰意识的一面。在沈从文的都市小说中，他直接表现出对那些身穿长袍、头披长发、气质高贵、外貌美丽的上层社会的女性的深深景慕。同时，在湘西小说中，他间接地流露出对理想女性的向往。其原因在于青年沈从文的艰难经验以及对都市女性的微妙态度。总之，沈从文的服饰意识相当复杂，既有批判，也有仰慕。

关键词

沈从文 都市女性服飾 服飾意識 中国现代小说

目次

- 一、はじめに
- 二、都市小説に描かれた直接的な表現
- 三、湘西小説に描かれた間接的な証明
- 四、「矛盾」の原因
- 五、おわりに
- 参考文献

一、はじめに

上篇において筆者は都市部の服飾文化に対して、沈従文は彼の小説の中で、独特の見解を展開したことを述べた。彼はその他の新文学派の作家と異なり、女性のニューモードに対して明らかに反抗的態度を示し、時には辛辣な風刺を加えている。なぜなら彼は女性の身体的特徴を強調するニューモードは墮落の象徴だと考えたからである。

だが一般的に小説家という人物は、複雑で多面的な性格を持つものであり、彼らが多重人格的側面を示すことはよくあることである。時には甚だしい場合、相反する面をも見せる。多面性と精神の多重性そのものが、小説家の創作の源であり原動力であると心理学者が指摘しているように、小説家自身でさえも、自身の創作活動における複雑な過程に気づき理解することは難しいと言われる。それは、彼らの潜在意識にまでその範囲が及ぶからである。つまりこの意味で、小説家自身の主張だけをもって彼らの精神を分析する根拠とすることは、十分とは言えない。必ず個々の事例や具体的状況を詳しく考察する必要が生じる。

沈従文が服飾に示した反感や辛辣な批判も、単純な嫌悪感から生じた可能性もあるが、様々なコンプレックスが複雑に絡み合った結果、生じたものであるかもしれない、と考える必要がある。本論下編においては、別の角度からの分析を加えることで、沈従文小説における都市部女性の服飾描写に関する全体構造を明らかにしようとする。

二、都市小説に描かれた直接的な表現

既にも上編で述べたように、沈従文は自らを「郷巴佬（田舎者）」「老实人（誠実で真面目な人）」¹と呼び、都市文化とは相容れないことを自ら明らかにし、『紳士の太太』『八駿図』などの名作風刺小説を書き上げた。しかしながらこれらは、事実全体のほんの僅かな一面にすぎない。彼は都市文化の人間性に反する面とは相容れない、と主張する一方で、都市文化に対する憧れと願望を描きだしている。その具体的表現をみてみよう。

（ある女性は）緑色の長袍²を着て、手には流行の最先端をいく紅い革ジャケットを持ち、ば

¹ 『習作選集代序』（1936）『沈従文全集』第9巻第3頁。「郷巴佬」「老实人」は類義語である。仮にすべての田舎者が信用できるとするならば、それは逆に言うとも都会人は、あまり信用できないという暗示となる。「老实」にはこの他に誠実であるという意味もある。

² 「長袍」の概念については、一般的に男性の長い袍服を「長袍」と呼ぶが、女性の長い袍服も「長袍」と呼ばれることがある。（これと同じ意味で旗人の袍服「旗袍」が、チャイナドレスとなる）つまり、「長袍」は二重の概念を持つ。広義においては「長袍」は長い袍服全体を指す。狭義では「長袍」は男性の袍服を指す。沈従文は、前者の意味で使用しているため、ここでは、「長い一部式ドレス」と訳すべきだが、この後の「長袍」との統一性を考え、「長袍」のまま使用する。この後についても同様に「長袍」を用いる。

っと見ただけで相手に「緑肥紅瘦³」の感覚を与える。女性は足がたいそう長いので、階を上がる時は、ともしなやかでさっそうとしている。年の頃はだいたい二十七、八歳であろうか。身づくろいが理にかなっているため、彼女の歳を少し若くみせているようだ。……彼女はすばらしく美しいとは言えないけれども、目鼻立ちははっきりしていて垢抜けており、おっとりとして高貴な風格がある。背丈などもちょうど頃合い良く育っており、着ている服もピッタリあっている。且つあの「緑肥紅瘦」の晩春の風格が、一日あった後には、忘れがたい好印象を人に与えるのである……彼女が着用するどんな色のどんな材料の衣服でもすべてうまくあっている。安価なものでも決して下品にならないし、高価なものであっても派手にならない。(「一个女人」身穿绿色长袍，手中拿着一个最时新的朱红皮夹，使人一看有“绿肥红瘦”感觉。这女人有一双长长的腿子，上楼时便显得十分轻盈。年纪大约有了二十七八，由于装饰合法，又仿佛可以把她岁数减轻一些……她不能说是十分美丽，但眉眼却秀气不俗，气派又大方又最贵。身体长得修短合度，所穿的衣服又非常称身，且正因为那点“绿肥红瘦”的暮春风度，故使人在第一面后，就留下一个不易忘掉的良好印象……她穿着任何颜色任何质料的衣服，皆十分相称。坏的并不显出俗气，好的也不显出奢华。【如蕤】1933）⁴

ここでの女性の服装は、情欲の道具でもなければ誘惑のシンボルでもない。服飾は人体の美の一部であり、人間性にかなう価値あるものとして描かれている。ここにはいささかの軽蔑も感じられない。むしろ都市社会が持つ洗練、品格、優美、そして沈從文の高貴な名家出身女性への好感と憧れをはっきりと読み取ることができる。

この段落で描かれている「長袍」は何気ない普通の服装のようであるが、実は沈從文の辞書の中では重要な意味を持つ言葉である。彼の手描かれた都市に暮らす多くの美女たちが「長袍」を着用しているのは、偶然ではない。「長袍」は沈從文の美学の中で特別な価値を持つ美麗の代名詞であり、更にある特別なシンボルへと成長していく。彼の小説に描かれる「長袍」は、現実に存在する衣服としての意義から、はるかに超越した存在価値を持つ。この時代は、既に旗袍が大流行し、沈從文の小説においても普通の人々は、旗袍を着用している。ゆったりした「長袍」を着用し登場するのは、上流社会に生きる女性の専売特許であると考えるのが妥当である。

「長袍」以外の「長髪」にも、沈從文は特別な愛着がある。この時代は都会に住む女性（特に流行を先導していた女子学生）の一部は、既に「剪髪」を始めている。「剪髪」とは伝統的な鬢や辮子（おさげ）を切ることで、「剪髪」後は髪が肩にかからないぐらいの短めの髪型になることがほとんどである。しかし、沈從文の手にある上品な理想の女性の多くは「長髪」である。ここで言う「長髪」の意味は「剪髪」を拒み、旧来型の髪型に固執することではない。「剪髪」後の髪の長さに注目すれば、彼女たちの髪の長さは、多くの女性を選ぶ長さよりはるかに長いのである。文化的に使わ

³ 緑が占める中でほんのわずかな赤が際立つ様子を表す。

⁴ 【如蕤】(1933)『沈從文全集』第7巻第329、335頁。筆者訳。この後特にことわりのないものについては筆者訳とする。

れる「剪髪」の言葉の意味は髪長さではない。髷や辮子をやめることが「剪髪」の目的である。髷や辮子をやめるだけでなく、普通の女性たちのように地味な短い髪を選ばず、自由な長い髪を肩まで下ろす行為は、都会に暮らす特別な上層階級の女性だけに許される大胆な選択なのである。

次に、『如蕤』以外の作品に登場する優雅で素敵な女性を見てみよう。

- 1、道中私は一人の婦人に出会った。この婦人は私さえもあっと驚くほど見目麗しい婦人である。その優美な女性は、薄紫色のシルクに包まれた下にプロポーションのよいしなやかで柔らかな曲線を描き出しており、私はこれが天の匠が自分自身でも満足した仕事であると考えた。その目と眉毛の配置、その鼻、すべてにおいてけなすところが全く見当たらない。(在路上我就遇到一个妇人，一个使我这人也大惊讶的美丽妇人。那个优美的在浅紫色绸衣包裹下面画出的苗条柔软的曲线，我承认这是一个天工自己满意的工作。那眼睛同眉毛的配置，那鼻子，都无可批评。『第四』1930)⁵
- 2、名前を玫という十六歳ぐらいになる娘はスマートで色白で、婉美な顔立ちの女の子である。水色でピロードの袖の狭いチャイナドレスを身につけ、灰色のラシャのチェックのオーバーをはおり……長く伸ばした髪を頭の後ろに垂らしている。物腰が落ち着いているのは、年齢に相応しくない大人の心があるからようだ。だが長い眉毛の下のちょっと上向きがちな目、清らかで穢れのない目玉は却って愛嬌が凝縮しており……(名叫玫的为一年约十六岁，有着俏丽身材，以及苍白秀美脸庞的女孩子。身穿浅蓝鹅绒的小袖旗袍，披灰色毛呢的方格大衣……头发留得很长，披到脑后非常平顺，神态凝静，仿佛有着一颗与年龄不相称的成年人的心。但长眉下一双微向上飞的眼睛，清明无邪的眼珠，却凝聚着一种爱娇……。『冬的空間』1930)⁶
- 3、しばらく二人が飲んでいると、ある女性をみかけた。その人は白いゆったりした長袍を身につけ、長い黒髪を後ろに垂らしており、ロビーから去って行った。……(その後)彼女は緑色の長袍に着替えたようで、出かけようとしているようであった。(两人喝了一会儿。只见到一个女人，穿了一件白色的宽博袍子，披着长长的黑色头发，从大厅里过去……女人已换了一件绿色长袍，像是要出去的样子。『一个体面的軍人』1931)⁷
- 4、その女性の年齢は既に三十を過ぎているようだが、着ているものがとても的確であるせいか、華麗でやぼったく感じない。年齢は少しいっていても尚、その佇まいは実に人の心を動かす。(彼女は)灰色の緞子に青い革の縁取りがあるゆったりとした長袍を着て、少し長めのつややかな黒髪を後ろに垂らし、手には深い紅色の花束を持ち……(その後)女性は既に紫の長袍

⁵ 『第四』(1930)『沈從文全集』第5巻第141頁。

⁶ 『冬的空間』(1930)『沈從文全集』第5巻第6-7頁。

⁷ 『一个体面的軍人』(1931)『沈從文全集』第4巻第319,321頁。

に着替えたようで、出かける支度をしているようである。(女人年纪仿佛已经过了三十岁，穿着十分得体，华贵而不俗气，年龄虽略长一点，风度尚极动人……穿了件灰色绸缎青皮作边缘的宽博袍子，披着略长的黑色光滑头发，手里拿了一束朱花……女人已换了件紫色长袍，像是预备出去的模样。『都市一婦人』1932)⁸

5、ご婦人が着用しているのは薄いページュ色の袍服で、両肩にかかる大きなウエーブのかかった漆黒の髪を後ろに垂らし、透けるような白さの瓜実顔、小さくて美しい二本の手が藍色の花の中で出入りしている。……この境地、この花と人、本当に素晴らしく美しい！（太太穿的是浅炒米黄袍子，配上披在两肩起大旋波的漆黑头发，净白的鹅蛋脸，两只纤秀的白手在那束蓝花中进出……这境界，这花同人，真是太美丽太美丽了。—『自殺』1935)⁹

6、碧碧が眠っているのは新しく取り替えたばかりの清潔で真っ白いシーツの上で、琥珀色の絹の薄い綿掛布団に、ほっこり温かな体を包んでいる。長い髪が揺れ動く頭が大きな白い枕に沈み込んでおり、寝返りを打つと、枕で赤く跡がついた小さな顔があらわれるが、眠っている様子は穏やかで安らかである。つぶった目がほんの少し湾曲した線をつくっている。まつ毛は長くて黒く、口もとには小さなえくぼまでもが作られている。(碧碧睡在新换过的净白被单上，一条琥珀黄稠面薄棉被裹着个温暖的身子。长发披拂的头埋在大而白的枕头中，翻过身时，现出一片被枕头印红的小脸，睡态显得安静和平。眼睛闭成一条微微弯曲的线。眼睫毛长而且黑，嘴角边还酿了一小涡微笑。『主婦』1937)¹⁰

これらの表現は、まるで気高くて且つ上品な女性たちを集めたギャラリーのようである。彼女たちは誰もが、自分自身の持つ美を外に向けはっきり表現している。繰り返しになるが、その中で特に目を引く服飾が、「長袍」と「長髪」である。「長袍」「長髪」こそが、沈從文の理想の女性のシンボルである。ゆったりした長袍や袍服を身につけ、長い髪を肩までおろした女性の姿は気高くて凛々しい。オペラの舞台に立つ長髪でゆったりしたドレスを身につけた素敵な女性と重なって見える。彼女たちこそが、青年沈從文のマドンナと言えるだろう。そして、特に「白色長袍」「綠色長袍」「紫色長袍」は沈從文が描く世界では、気高く上品な女性が着用する服装のキーワードであり、我々は、沈從文の心に秘めた都市女性像の理想の姿をつかみとることができる。

三、湘西小説に描かれた間接的な証明

本論で話題としているのは、沈從文小説に描かれた都市部女性に関する服飾描写であるため、筆

⁸ 『都市一婦人』(1932)『沈從文全集』第7巻第170,181,187頁。

⁹ 『自殺』(1935)『沈從文全集』第8巻第337頁。

¹⁰ 『主婦』(1937)『沈從文全集』第8巻第351頁。

者は彼の湘西小説については多くを語るつもりはないが、沈從文のマドンナや理想の女性像に話題が及んでおり、関連性を追求する意味において、ここで湘西（湖南省西部）小説についても考えざるをえない。湘西小説に登場する女性は都市部の女性ではないけれども、筆者は沈從文の理想の女性像を追求する上では、彼女たちも都市部の女性と同じように一定の関係があると考え。間接的な検討材料という位置づけで、ここに簡単に分析を加える。

湘西を背景とする小説は、おおよそ二類に分類することができる。それは非現実的な伝奇性作品と現実性作品の二種類である。まず前者について考察を加える。

「湘西ロマンスシリーズ」は、湘西を背景とする神話伝説に似通った伝奇性ロマンス小説である。その代表作としては、『龍朱』『媚金、豹子與那羊』『月下小景』『尋覓』などがあげられる。これらの作品は仏教伝説或いは民間伝説を来源とし、沈從文が独自に手を加えることで特別なスタイルの小説となったものである。いわゆる伝奇作品に属するため、著名な伝奇作品の『千夜一夜物語』同様、作品の中では色鮮やかなことばが駆使され、大胆且つ自由に恋愛を語るののである。伝奇性ロマンスとは、極めて感動的な恋愛物語である。そのヒーローは、アポロの神々のようにハンサムである。沈從文は、「苗族の白耳種族の美男子は、その地域の父母たちが嘗てアポロ神を彫塑する仕事に関係したことがあるようで、それ故彼らはアポロ神の美しい姿を子供に授けたのである。族長の息子で今年十七歳の龍朱は、美男子の中でもその頂点にいる眉目秀麗な男子である。美しく強健な様は獅子のごとく、温和で大人しい様は子羊のようである。彼は人類のモデルである。権威、力、光などの象徴である。ありとあらゆる喩えが、彼の美を表現するためにあるかのようである¹¹⁾」と書いている。そしてヒロインはまるでウェヌス（ヴィーナス）のように、「目が覚めるような美しい様は仙人のようであり、優雅な気品は神のよう¹²⁾」だと表現している。そして、この世の中で最も優雅で端麗な女性と最も強健な美男子が出会い、お互いを深く愛し、この愛のためならたとえ死んでも構わないと考える。作品の中に登場する媚金については「白臉苗人の中のとびきり美しい女性（「白臉苗中頂美的女人）」、豹子については「鳳凰族の中でも顔立ちが非常に端正であり、また群を抜いたすべての美德を兼ね備えた男性（「鳳凰族相貌极美又顶有一切美德的一个男子）」と表現している。彼らは「歌合で愛情を確かめカップルとなる（「因唱歌成了一对）」¹³⁾のだが、ある誤解が元で、二人は自殺を図りともに前後してなくなる。『月下小景』の主人公である男女も同じように、揃って服毒自殺を図りなくなってしまう。彼らの自殺の原因は誤解ではない。お互いを深く愛し、お互いの愛情が極限に達したが故に、死という選択をもって最高の愛を極めたのである。

上述した作品は、極端なまでに誇張した表現を用いることで、極限まで美化した主人公と強い物語性という特徴が際立っている。伝奇性があまりにも強いために、読者や評論家には現実性に乏しく、勝手気ままに適当に構成した作品であるという印象を与えてしまう。筆者自身も時には少々幼

¹¹⁾ 『龍朱』（1929）『沈從文全集』第5巻第326頁。原文は「白耳族苗人中出美男子，仿佛是那地方的父母全曾参预过雕塑阿波罗神的工作，因此把美的模型留给儿子了。族长儿子龙朱年十七岁，为美男子中之美男子。这个人，美丽强壮像狮子，温和谦驯如小羊。是人中模型。是权威。是力。是光。种种比譬全是为了他的美。」

¹²⁾ 『尋覓』（1933）『沈從文全集』第9巻第237頁。原文は、艳丽如仙，雅素如神。

¹³⁾ 『媚金、豹子、与那羊』（1929）『沈從文全集』第5巻第352頁。

稚ではないかと考えることもあるが、筆者は文学研究者ではないので、これらの作品の文学的価値についてはあまり関心がない。関心があるのは、作者沈從文の美麗の理想が何処にあるのかという点である。これらの作品は伝奇小説であるため、沈從文は自分自身が持つ理想を完璧なまでにまったく自由に描くことができた。それゆえ作品の価値とは別に、彼の美意識が無意識の内に自然と表現されたと筆者は考えている。これらの作品の中には、上述した都市部女性の美女ギャラーと同様、ロマンス美女ギャラリーとも呼べる美女たちが登場する。以下に具体的な作品からロマンス美女に関する描写を見てみよう。

A、（龍朱が）眠りについてほどなく、夢の中でその女性が、ゆっくりと歌を歌いながら来るのに出会った。白い上着とスカートを手をまとい、髪を後ろに垂らしている姿は、苦しみや難儀から人々を救う観世音菩薩のようである。「（龍朱）」睡了不久，就梦到那女人缓缓唱歌而来，穿白衣白裙，头发披在身后，模样如救苦救难观世音。」『龍朱』1929)¹⁴

B、これは女の子で、彼女のみだれた長髪の美しい頭をこの青年の太ももにもたれかけ、太ももを枕にして安らかに寝息をたてずに眠っている。……女性は安らかに彼の傍に横たわり、白い上着やスカートが、細くて長い肉付きの良いしなやかで芳しい香が溢れだす身体をおおっている。「这是一个女孩子，把她那长发散乱的美丽头颅，靠在这年青人的大腿上，把它当作枕头安静无声的睡着……女人正安安静静的躺在他的身边，一堆白色衣裙遮盖到那个修长丰满柔软溢香的身体。」『月下小景』1930)¹⁵

C、女性が目に入った。顔立ちやスタイルがめったにいないような麗しい女性である。白銀の寝台に腰掛け、白銀の絹糸を紡いでいる。若くて顔立ちが整った十人の小間使いが、皆そろって白いシルクのしなやかな長袍を身につけ傍に控え立つ。……また一人の女性が目に入った。神業としか思えないような趣がただよい、先ほどの女性と較べても更になお美しい。黄金の寝台に腰掛け、黄金色のわずかなほこりをつまみ出している。左右の小間使い合わせると二十人が、黄金色でシルクのしなやかな長袍を身につけ傍に控え立つ。……洗練された上品さを強く感じさせる女の子が、緑色の長袍を身につけ、皇女の傍らに立ち、白玉で作った笙を吹いている。「见到一个女人，脸儿身材，俏俊少有，坐在白银榻上，纺取白银丝缕。年轻体面丫环十人，皆身穿白色丝质柔软长袍，在旁侍立……又见一个女人，神韵飞扬，较前尤美，坐在黄金榻上，拈取黄金微尘。左右丫环，计二十人，身穿黄色丝质柔软长袍，在旁侍立……有一秀气逼人的女孩，身穿绿色长袍，站在公主身旁，吹白玉笙。」—『尋覓』1933)¹⁶

¹⁴ 『龍朱』（1929）『沈從文全集』第5巻第338頁。

¹⁵ 『月下小景』（1930）『沈從文全集』第9巻第219-20頁。

¹⁶ 『尋覓』（1933）『沈從文全集』第9巻第236-37頁。

都市小説に登場する美女たちと伝奇小説に登場する美女たちの服飾描写について比較分析すると、意外なことに気づく。これら二通りの美女たちは住んでいる環境などは全く異なるが、美女たちの中にある共通点を見出すことができる。前面での『如蕤』に続く1~6の描写と伝奇小説A~Cの描写には、「白色」「長袍」「長裙」「長髪」という共通の単語が、たびたび出てくることがわかるであろう。これらの単語は、そこに登場する美女たちの美麗を表現するためのキーワードのような存在となっている。

先ほど述べたように、「長袍」「長髪」は沈從文の理想の女性を表すシンボルである。何故なら、「長袍」「長裙」「長髪」にはいずれも現実とは一歩かけ離れた独立した世界、神話的なロマンティックな香が強く漂う。これらの単語は、登場するヒロインたちの純潔、端麗、清新を表現すると同時に、彼女たちの高貴な気品をも強調する。つまり都市小説に登場する美女たちと伝奇小説に登場する美女たちは、表面的にはまったく異なる世界に暮らす人物であるが、沈從文の精神世界では、同じ価値を持つ存在だと考えることができる。

湘西を背景とする小説には本論において既に紹介した伝奇小説の他に、現実世界を描く作品がある。伝奇性が強い作品に女神のような人物が登場することは、誰でも簡単に理解できる。一般的に言えば、現実性が強い小説、特に郷土小説のような作品では、神話的要素を帯びた人物は登場しにくいのが普通である。しかし、沈從文の作品を詳しく観察すると、郷土小説の中にも、神話小説と同じようなマドンナを見つけることができる。郷土小説での世界は田舎であるが、極限まで美化された美女が登場し、同じようにギャラリーとも言える様相を呈している。その中で特に際立って強い印象を与えるのは、『辺城』に登場する美少女の翠翠である。ここで彼女についての描写を見てみよう。

翠翠は風と日差しの中で育ったので、皮膚の色は真黒くなった。彼女の目に触れるものがすべて青い山や緑の水であったので、その瞳は水晶のように明るく澄んでおり、自然が彼女を育み彼女を教育した。その為無邪気で明るく、色々な点で小さな獣のようであった。そのうえ非常に利口であり、山で暮らす黄色いキョンのように、いちども残忍な事を考えたこともなければ、悩んだことも、腹を立てたこともなかった。(翠翠在风日里长养着，把皮肤变得黑黑的，触目为青山绿水，一对眸子清明如水晶，自然既长养她且教育她。为人天真活泼，处处俨然一只小兽物。人又那么乖，和山头黄鹿一样，从没想到残忍事情，从不发愁，从不动气。—『辺城』1934)¹⁷

この描写は非常に有名であるが、一見してわかるように、服飾に関する描写はない。なのに、服飾に関する描写が何もないのに、なぜこの一段落に筆者が強い関心を抱いたかと言うと、それは沈

¹⁷ 松枝茂夫『現代中国文学全集』第8巻『沈從文篇』10頁、河出書房。松枝氏の訳を参考に筆者により修正を加えた。

従文の回想録に由来する。彼によると娘翠翠のモデルは三人おり、その内二人は田舎で暮らす庶民の普通の少女であり、もう一人は彼の夫人張兆和であると書かれているからである。三人のモデルがどの割合で使われたかなどの詳細な点については、推測するすべもないが、この一文から、翠翠にも沈従文の理想の女性像が投影されていることがわかるからである。或いは翠翠も、彼のマドンナの一人であるということが出来る。伝奇性小説の中に登場するマドンナは女神であったために、その美しさは並外れて際立っており、その表現はロマンティックで人々の胸を深く打つ。郷土小説のマドンナは田舎町に暮らす美少女たちであるため、無邪気で美しく、純粹で可愛らしい。翠翠は自然を友達として美しく成長し、申し分ない人柄で、彼女は湘西の山河のように自然そのものでありピュアである。翠翠と二老が育む愛情も純真で自然で、いかなる不純な要素も感じられない。

こう考えると双方に描かれたマドンナは全く異なり、明らかに相反しているようであるが、そこにはある共通点を見出すことができる。それは彼女たちの美が、俗世間とはかけ離れた穢のない清らかな美であることである。確かなゆるぎない美しさとは、現代都市機構が生み出した商業的要素を一切含まない、算盤勘定などをまったく考えない美なのである。

彼女たちの美しさは俗世間とは一線を画した美であり、彼女たちの存在そのものも幻想や夢の中でしか存在できないのかもしれない。ある意味小説で描かれる湘西と清らかな湘西の実体そのものが桃源郷であり、マドンナ自身も桃源郷の中に存在する美しい幻影にすぎないのかもしれない。

四、「矛盾」の原因

本論の「上篇」においては、虚偽や虚飾があふれ出す不潔な文明社会、都市部に暮らす女性への批判的な態度を描く沈従文に向き合い論述した。彼の都市部女性の服飾への厳しい批判的な態度は、20年代の中後期から始まり、30年代においてもっとも強くなる。30年代は沈従文の黄金時代であり、彼は大きな成功を手に入れた。この成功を手にしたことによって彼は、都市部女性が着用する服飾への彼自身が持つ批判的な態度を、迷いなくはっきりと表明するようになる。

しかるに本論で既に述べたように、彼の小説の中には長袍を身にまとい、美しい長い髪を後ろになびかせる高貴で優雅という言葉がぴったりあてはまる沈従文のマドンナ達が描かれる。この沈従文の相反する両極端に位置する矛盾した態度を、どのように理解したらよいのであろうか。

まず筆者は、沈従文の服飾への批判的な態度には、彼の挫折と深い関係があると考えている。少年沈従文は、まともな教育を受けていない。15歳の時軍隊に入り、それから数年の歳月を軍隊で過ごすのである。除隊後、新文化運動の影響を受け、1923年夏、ついに彼は大都会北京にやってくる。田舎から大都会にやってきて主流を追いかける田舎出身の青年の心の中には、できるだけ早く都市社会の一員になりたいという思いが一杯であっただろう。新文化、新生活、新文学への憧れや期待や夢が、胸に溢れていたことだろう。しかし、都市文化はそんなに甘いものではない。彼を温かく迎え入れることはなく、そればかりか彼が抱く青春の夢に冷たい水を浴びせ、彼を酷い目をあわせ、厳しい洗礼を次から次へと浴びせかける。その時彼は収入もなく、職業もなく、あるのは夢と希望

だけである。彼は働きながら勉強したいと切望するが、そのような機会には全く恵まれない。大学に入って勉強したいと考えるが、国立大学には入るだけの能力もなく、また私学に入るにはお金もない。学校に入ることを諦めるしかなく、独学で作品を書いてみることにしか、進む道が残されていなかったのである。彼は既に著名であった新文学作家郁達夫、徐志摩らを崇拜し、自分自身の手本としていた。彼の人並み以上の知恵と、ずば抜けたセンスによって、北京に来てからわずか一年半、彼の短編作品(小説、散文、新体詩)は新聞や雑誌などに掲載されるようになる。これは成功への第一歩を踏み出したかに見えるのだが、その実はこれこそが、新たな紆余曲折の始まりなのである。本来作家になることそれだけでも、簡単なことではない。特に彼のような他省から来た青年にとっては、難題が山積している。編集者に送った彼の投稿文がそのまま読まれることなく、ただゴミ箱に捨て去られるのを避けるために、彼は何度も女性と思えるようなペンネームで雑誌や新聞に投稿している。度重なる挫折によって、青年沈從文は反骨精神、反抗心を生み出すのである。彼は「目の前にあるものは全て敵だ!法律、教育、実業、道徳、官僚……全て、全部、敵ではないものはない!」(眼前的一切、都是你的敌人啊!法度、教育、实业、道德、官僚……一切一切、无有不是。)¹⁸と叫ぶ。

1923年から1927年までの4年半は、彼自身が一日も早く都市社会の一員になる為に孤軍奮闘した4年半であると同時に、困窮極まりない、飢えに苛まされ、絶え間ない失望、苦悶が続いた4年半でもある。

田舎から一人やってきた青春期の青年にとっては、都市社会から受ける圧迫は経済的方面だけではない。異性に関わる方面にも及ぶのである。想像して見て頂きたい。二十歳そこそこの若者が、見るものすべてが真新しい大都会にやってきて、口紅や香水をつけ、最先端の衣装を身にまとったセクシーな女性に出会った時、彼の心の中は、彼女たちへの憧れや恋愛に似た感情が溢れ出し、彼女たちと触れ合いたい、おしゃべりしたい、つきあいたいという熱い思いが、温泉から溢れ出るお湯のように溢れ出ていたことだろう。

『冬的空間』(1929)は恋愛小説である。若い女性に恋をした主人公は心の中で「僕は君たち女性

¹⁸ 『狂人書簡——給到××大学第一教室絞腦汁的可憐朋友』(1925)『沈從文全集』第11巻第26頁。この時の経験について、彼は後になって、半分冗談を交えて次のように語っている。「どうやって新しい現実から学べば良いのだろうか。まずは小さなアパートのカビだらけ、臭く湿った部屋で、零下十二度の寒さの中、ストーブをつけることもなく冬の寒さに耐え続けることを学ぶのだ。それから、二、三日食べ物もなく、全く空っぽのお腹で飢えに耐える力を学ぶのだ。そしてその次は、飢えと寒さが切迫し、希望も助けも皆無な状況の中で、図書館に入って自分で模索して何かを読んでいく本領を学ぶのだ。それからペンを持って昼夜を問わず書き続け、できた作品を1頁も残さず各新聞社、雑誌社に投稿する。少しも成果がないまま待ち続ける間、仕事の失敗に対する抵抗力と適応力を学ぶのだ。」(怎么向新的现实学习呢?先是在一个小公寓湿霉霉的房间,零下十二度的寒气中,学习不用火炉过冬的耐寒力。再其次是三天两天不吃东西,学习空空洞洞腹中的耐力,并其次是从饥寒交迫无望无助的状况中,学习进图书馆自行摸索的阅读力。再其次是起始用一支笔,无日无夜写下去,把所有作品寄给各报章杂志,在毫无结果等待中,学习对于工作失败的抵抗力和适应力。—『從現實學習』(1946),『沈從文全集』第13巻第375-76頁。他にも『棉鞋』(1925)『一個天才的通信』(1929)では、彼が北京にきた最初の数年の貧しさと原稿料のために奔走し疲れ果てる様子が具体的に書かれている。

の中で最も綺麗な人に僕を愛させる！」(我将使你们女人中最美丽的女人爱我。)¹⁹と叫ぶのである。このような感情は、必ずしも彼一人の願望だけではあるまい。都市に暮らす女性は田舎者にとって、本来ある種憧れを抱かせる存在であり、彼女たちの存在そのものにプラスの意義がある。しかしながら、田舎から出てきた貧しくてダサイ若者に対して、都市に暮らす女性たちが歓迎の態度を示すはずもなく、彼らに浴びせられるのは蔑視を帯びた冷たい視線ばかりであったとしたら、やがてその失望と挫折感はストレスへと変化し、苦悶と絶望が広がっていくことだろう。

しかし、感情が豊かで尚且つデリケートで細やかな沈從文は、青春時代の性衝動が解消できるだけでは満足できない。彼にはすてきな理想がある。それは真実の愛に出会いたいという願いである。沈從文は「狂人」の言葉を借りて「私たちが必要とする愛情は人間のものであり、神聖な要素をも持つ愛だ。(我们需要的爱乃是人而揉杂着神的分子的爱)」と、語るのである。たとえそれが主人公の男性と妓女の交流を描いた小説『十四夜間』(1927)であっても、不潔な描写は感じられない。むしろ主人公の男性の性的交流を渴望する姿だけではなく、愛情に対する憧憬をも描き出すのである。しかし、現実はそのほど甘くはない。「あなたは本当にかわいそうな人だなあ！あなたの素直な“少年のココロ”を欲しいと願う女性などいるものか！（你真是可怜哟！谁个女人需要你这颗“少年的心”？）」²⁰となるのである。

都会に暮らす女性への憧れは、挫折が原因となり、ある種の反感へと変化していく。そして20年代後半になり、沈從文は次第に彼の作品の中で風刺的手法を用いて、その反抗心を表現するようになる。例えば、『公寓中』(1925)に描かれる主人公は、異常なまでに女性を眺め続け、しかも満足することはない。そしてだんだんと病的な自暴自棄の状態へと陥っていく。彼は絶望のそこから「数えきれないほどの女性が皆それぞれ特別な外見を持ち、その体からは、化粧品の香のような化粧品の香でもないような、ある種独特の女性特有の香が放たれる。これら全てが敬慕してやまない中から、私に強烈な失望を感じさせるのである。」(数不清的女性特具形色；还有那从身上放出那一种是化妆品非化妆品，一种女人特有的香味，这都是使我从醉心企慕中生出种极强烈的失望。)²¹と叫ぶのである。

『第二个狒狒』(1925)と『用A字記録下来的故事』(1925)は、ギリシャ神話を使って、鬱積した青年男子の心にある性欲を表現する。絶望に近い主人公も同様に「現代教育が育んだ新しいスタイルの女性は美しすぎる。僕は速やかに死ぬべきだ…」(现代教育铸定的新式姑娘，太美丽了；我应

¹⁹ 『冬の空間』、『沈從文全集』第5巻第9頁。他にも『重君』(1926)には、青年男性が性的ストレスに落ち入り、隣にいる恋人の私語を盗み聞くことで湧き上がる情欲の幻想に満足する様子が描かれている。『墓君日記』(1927)では妻がいる男性主人公が女性の誘惑に負け、多重恋愛に陥る様子が描かれている。『一個晚会』(1926)『自殺的故事』(1929)の中にも同じような場面がある。これらの作品は、様々な視点、色々な角度から青春時代の困惑、期待、失望が入り交じる苦悶を表現している。

²⁰ 『狂人書簡一再給你』、『沈從文全集』第11巻第25頁。

²¹ 『公寓中』、『沈從文全集』第1巻第353頁。

该赶快死去……) ²² と呻くのである。このような態度は1930年代まで続き、次第に明らかに皮肉を込めた筆使いへと変わっていく。

男性ならきつと白いワイシャツの上に、模様の入った上品な蝶ネクタイを上手に結べる。もっとお洒落な者は、ズボンのベルトのあたりに懐中時計の飾りが見える。上着の小さな胸ポケットには、模様が入ったシルクの小さなスカーフが入れている。……女性なら顔に白粉をはたき、紅をさし、髪はパーマをかけて大きな鶏の巣のようになる。長い髪型であれば、長い髪は頭の後ろに垂れ、風が吹けば柳のように動くのだ。体からはいつもある種何と表現すればよいかわからない香りが漂っている。(属于男性，一定懂得在白衬衫上配置花纹雅致的领结。还有讲究的，是裤带边上有一个表牌。上衣小口袋里有一块花绸小手巾……至于女性，脸上扑白粉搽红胭脂，头发荡大的有些像鸡窝，留长的便披到脑后，让风吹动如杨柳，身上总是有一种说不分明的香味。『知己朋友』1930) ²³

このような態度が更に発展して『紳士の太太』『八駿図』等の名作が生まれるのである。

しかしながら人間は常に矛盾を抱えており、一筋縄ではいかない。特に芸術家は多面的な側面を帯びた人種であることが多い。現実世界においても、大好きな異性に嫌われ、本来の愛情が180度形を変え、相手を恨み、憎むようになることも珍しいことではないだろう。恨みが強ければ強いほど、本来抱いていた愛情もどれほど強いかかわるのである。同じ理屈から言えば、ある意味『紳士の太太』『八駿図』の後ろにあるのが、沈從文の真の欲望かもしれない。

最後に沈從文が都市に暮らす女性の服飾に賞賛と反感の両面を示していることに対して、簡単に分析する。細かく見ていくと彼が賞賛を与えているのは、高貴で優雅な都市社会の上層部に暮らす女性である。長袍に身を包み、長い髪を後ろにゆったりと伸ばした美しいマドンナに彼はあこがれを抱いているが、都市の下層に暮らす女性たちに対しては、反感の対象としている。沈從文の私生活における選択をみれば、我々はその真実を明らかにすることができる。

沈從文が田舎育ちであることを誇りに思い、上流社会の風潮に馴染めなかった、という彼の言葉を信じるなら、彼がとった私生活での選択をどうやっても理解、解決することができない。つまり湘西シリーズに登場する翠翠、三三、蕭蕭、夭夭たち一連の天真爛漫で純粋な田舎生まれの美少女たちを、彼が心から可愛いと思うなら、なぜ翠翠のような純粋な美少女を伴侶としないのだろうか。ご存知のように、沈從文夫人張兆和は富豪の出身であり、結婚前は中国公学英語科の学生である。彼女は英語を学ぶ大学生であり、富豪ご令嬢グループの一人である。これは当時としては最先端を歩く女性であり、翠翠たちとはまったく真逆の世界に住む人たちである。沈從文は自由な恋愛の後

²² 『用A字記録下来的故事』、『沈從文全集』第1巻第379頁。『乾生之愛』(1927)では若者の女性への一方的な片思いと女性との交際を渴望しながらも叶わない姿を描いている。あの若者にとっては、都市部の女性は男性を誘惑するだけの存在であり、漁師が魚を狙うように、女性の目的は自分にふさわしい男性をモノにすることだけである。

²³ 『知己朋友』1930『沈從文全集』第6巻第402頁。この作品の中にある「蕩」が「燙发」の「燙」の誤植だと中国人研究者が既に指摘している。

に張兆和と結婚している。この人生の選択は、彼が作品の中で公表する他のどんな言葉よりも重みがある。この点を理解すれば、幾度と無く美しいしとやかな上流階級の女性が登場し、なぜ彼が優雅な「長袍」とお洒落な「長髪」に対して特別な美的価値観を持っていたかが、容易に想像できる。

従って彼の態度は一見矛盾しているように見えるが、その実は矛盾していない。彼が心から欲したのは、優雅で高貴な都市社会に暮らす女性であり、この域に達しない一般的レベルの世俗に暮らす女性に対しては、異なる態度を示している。これだけのことである。

五、おわりに

数百年続いた服飾習慣が激しく変化した時、人々が多様な反応を示すのは当然であり、新聞や雑誌などから我々が読み取れるものは、是か否と言った画一的な態度になりがちである。然るに文学は複雑な形態から社会の変化や人々の心理状態などを表現する。例え一人の作者であってもその態度は時に応じ変化するものであり、本来人間の心という代物は多面性を持つものである。沈従文は彼自身の小説において自分自身の心理状態が多様な面を持つことを表現しただけでなく、文学表現の多様性をも表現している。本論の「上編」では都市部女性の服飾に対する沈従文の否定的な態度を扱ったが、「下編」ではまったく逆の態度を見せたことを述べた。どちらに描かれているのも作者の紛れも無い意識状態であり、時代の変動の中で移りゆく知識人の反応だと考えることができる。

沈従文の小説において、服飾描写に優れている作品は湘西シリーズであり、都市小説は湘西シリーズに比べれば服飾描写においてははिसさか劣る（本論においては、湘西シリーズの服飾描写技術や技能面については触れていない。これは後日紙幅をさく予定である）。彼の都市小説における服飾描写の技術は高くないが、これらの小説から別の一面を読み取ることができる。本論上編の「はじめに」に書いたように、筆者の目的は、小説から中国人の意識の中にある服飾変遷への反応を分析することである。この意味においては、沈従文の都市小説は優れた価値ある研究対象であり、服飾の急激な変化に直面した複雑な心理や心情を読み取ることができる。つまり彼の都市小説の価値は、この意味においては湘西シリーズよりも優れていると言える。

参考文献

- 沈従文（2002）『沈従文全集』第1～13巻（小説・散文・伝記巻）、太原、北岳文芸出版社
劉洪濤・楊瑞仁（2006）『沈従文研究資料』天津、天津人民出版社
邵華強（1991）『沈従文研究資料』広州、花城出版社
呉世勇（2006）、『沈従文年譜』天津、天津人民出版社
凌宇（1988）『沈従文伝』北京、十月文芸出版社
趙学勇（1990）『沈従文与東西文化』蘭州、蘭州大学出版社
呉立昌（1991）『沈従文—建築人性神廟』上海、復旦大学出版社
韓立群（1994）『沈従文論』天津、天津人民出版社

- 黄献文(1996)『沈從文創作新論』武漢、華中理工大学出版社
- 覃新菊(2006)『与自然為鄰：生態批評与沈從文研究』長沙、湖南師範大学出版社
- 賀亮明(2011)『沈從文城市題材小説審美視覚研究』成都、西南交通大学出版社
- 石柏勝(2011)『文化選択与審美判断：沈從文研究總論』長春、吉林大学出版社
- 小島久代(1997)『沈從文一人と作品』東京、汲古書院
- 城谷武男・角田篤信(2005)『沈從文「辺城」の校勘』札幌、サッポロ堂書店
- 城谷武男・角田篤信(2006)『沈從文「蕭蕭」「阿金」「牛」の版本研究』札幌、サッポロ堂書店
- 城谷武男・角田篤信(2007)『湘西—1996年秋冬写真と文』札幌、サッポロ堂書店
- 城谷武男・角田篤信(2008)『沈從文研究：わたしのばあい』札幌、サッポロ堂書店
- 城谷武男・角田篤信(2012)『沈從文「辺城」の評釈』札幌、サッポロ堂書店

(2016年9月28日受理)